

今回もシンプルなケースを材料に、ホメオパシー的なアプローチを学びましょう。

ダイナミクススクールで、ジェレミー・シェア先生は、ケースを受け取ったら、「前分析」をしてから「本分析」をすることを勧めています。「本分析」では、特徴的な症状を1枚の紙にすべて書き出して、全体を眺めることを提案しています。

①「Case Taking」--->②「特徴的な症状を捉える」--->③「前分析」--->④「本分析」  
--->⑤「統合(病の中心)」--->⑥Rep.--->⑦レメディの決定  
...という流れになります。

「本分析」の後には、そのケースを統合して3~7個の過剰書きで、そのケースにおける「病の中心」を表現してみると良いと提案してくれました。この方法がベストかどうか分かりませんが、CHKでは、このアプローチの方法を基本にケース学習を進めています。この方法を学んで移行、CHK各講師の臨床成績も、より上がっていると思います。

先月もお伝えしましたように、ケース学習の取り組み方の順序は、以下の通りです。

1. まず、ケースを一読して、ケースから受ける①印象を書き留める。
2. 再読して、クライアントの特徴的な点(症状)をピックアップする。
3. ピックアップした特徴的な点の全体を眺める。
4. これらを元に、「前分析」を試みる。(正確に分からなくても良い)
- ②健康度(0~10)
- ③予後(良いレメディがある時/ない時)は、どうなるか?
- ④救急性(急性か慢性か~救急性があれば、まずはそこから始める)
- ⑤治癒を妨げているものの有無は? ⑥親和性(部位)
- ⑦マヤズム傾向(Psora Syphilis Cancer TB等)
- ⑧全体性(CASEでの乱れはどこにあり、レメディはいくつ必要になるか?)
- ⑨バイタリティー
5. 本分析=「何が癒されるべきか?」(病の中心)をとらえる。  
最終的には、「統合した1文」にまとめると良い。
6. 「何が癒されるべきか?」から外れない症状を Rubrics として選び、レポートライズ(Rep.)する。
7. Rep.表の候補レメディから、ベストレメディを選ぶ。
8. 最終的には、ポテンシーとドーズを決めて、クライアントに提案する。

さて、ケース学習では、この教室を出たら、決して、その内容について話すことなく、守秘義務を守って下さい。  
では、始めましょう。